

最期の願いを叶えるために

調布市立第六中学校 3年 市川 みらい

今年3月、祖父は最期の願いを叶え、天国へと旅立った。

祖父は2年前に末期がんの宣告を受け、余命がわずかであると知らされた。祖父は「大好きな自宅で大往生したい」それが最期の願いだと言っていた。そのため、自宅でがんの苦痛を和らげるための「緩和ケア」を受けながら残りの日々を過ごすこととなった。祖父母の家に来たケアマネージャーさんが、住宅医療も介護サービスも、税金で大部分をカバーできることを教えてくれた。だんだん不自由になってくる体を支える車イスや電動ベッド手すりのレンタル。介護ヘルパーさんの処置など体だけでなく、精神面も支えてくれるサービスに年金で暮らす祖父母はとても安心していった。自宅で治療と介護が受けられることで、祖父は一番の楽しみのお母の手料理を味わうことができた。2021年5月、祖父の誕生日には毎年恒例の庭でのバーベキューをすることもできた。祖父は少ししか食べていなかったが、とても楽しそうだった。車イスを使って公園を散歩したり、ケアマネージャーさんと話したりする祖父はいつも穏やかで幸せそうで、その光景が私は好きだった。2022年3月、祖父は大好きな自宅で眠るように息をひきとった。初めて家族を看取った私は目から涙があふれて止まらなかった。祖母は

「介護・医療サービスの助けがあったからお父さんの願いを叶えてあげられた。後悔のない見送りができた。」と感謝していた。

私はこれまで税金について深く考えたことがなかった。納税が「国民の三大義務」の一つと学んではいたが、なぜ納税は義務になるほど大切なのだろうか。今回、改めて税金について調べてみて分かったことは、税金は国民が安心して暮らせるための目に見えない支えであるということだ。

私たちが納めた税金が最も多く使われているのが、医療や介護、福祉などに使われる「社会保障関係費」だ。税金の33.7%が使われている。

世界には祖父のように突然、病気の宣告をされる人もいるし、急に事故に遭い、体が不自由になってしまう人もいる。このように人生は何が起こるか分からない。そんな時、医療や介護サービスを受けると、とてもお金がかかる。祖父は何度も手術を受けていて、その手術代は100万円を超えることもあった。しかし、「高額療養費制度」という一定額以上の医療費を国が支給してくれる制度のおかげで、10万以内の出費で済んだという。

税金がなかったら病気になった時「お金がないから治療できない」という人が出て悲しい社会になってしまうと思う。私たち一人一人が納めた税金は誰かを助けている。目には見えないけれど税金はみんなの助け合いの心が集まったものだ実感した。これからは目に見えない税金に感謝して暮らしていきたい。